

時代とともに移り変わる中国の留学ブーム ～中国人留学生は「ウミガメ」から「コンブ」へ～

北京事務所

はじめに

中国では、海外から帰国した留学生のことを「海亀（ウミガメ）族」と呼びます。中国語で、海外から帰ってくるという意味の「海帰」と、「海亀」の発音（いずれも haigui）が似ていることが由来です。大海原で長い間経験を積み、成人すると故郷の海岸へ戻ってくる海亀のように、母国に恵みをもたらすという意味が込められていたとも言われています。



海亀族が就職市場で冷遇される様子を風刺したイラスト。卒業証書を手を高学歴を訴える海亀族だが、企業に「我々がみるのは実務能力だ」といわれている。（金羊網より）

かつて、中国のエリート階層の代名詞だった「海亀族」ですが、最近では、就職できずブラブラしながら仕事を待つ「海待族」と呼ばれる若者が増えてきました。「海待」と「海带（中国語でコンブの意味）」の発音が似ている（いずれも haidai）ことから、彼らは「海带族」とも揶揄されています。

本稿では、時代とともに移り変わってきた中国の留学ブームを、「海亀族」という言葉とともに振り返ります。

改革・開放とともに盛り上がった留学ブーム。華やかに活躍した「海亀族」

中国で最初の留学ブームが起きたのは、1970年代末から80年代中頃にかけてです。中国では、1966年に始まった文化大革命の影響により、留学生の派遣が長い間中断されていました。その後、1978年に改革・開放政策が実施されると、欧米諸国との経済格差を取り戻そうと、高度人材育成のため、留学生の大量派遣政策がとられました。この時期の留学は、ほとんどが国費留学であり、厳しい選抜試験を突破した、中国トップレベルの学生たちが派遣されていました。彼らは帰国後、国家に分配された職業に就き、中国の発展に大きく貢献しました。

その後、1980年代末から1990年代初めにかけて、2回目の留学ブームが起こりました。この頃には、中国の改革・開放がさらに進み、成績の優秀な学生が、海外の奨学金を取得することも可能になっていました。それらを活用し、海外で修士号・博士号を取得し

ようと、大量の私費留学生在が現れたのです。彼らは中国に最先端の技術を持ち帰り、国内の労働市場で高く評価され、相場を大幅に上回る高報酬を得ていました。そのため、「海亀族」は、学力も収入も高い、エリート階層の代名詞でもありました。

留学生数の増加と質の低下。「海帯（コンブ）族」の出現

3回目の留学ブームは、2000 年前後から現在にかけてです。留学の若年化の傾向が強まり、高校を卒業した後、直接海外の大学に入学する留学生在が出てきました。学力が足りず、国内の有名大学に進学できない学生たちが、親の財力によって国外の大学へ留学するケースが増えてきたのです。また、留学の大衆化もいっそう顕著になりました。中国の急激な経済発展により、一般家庭の所得が上がり、多くの家庭にとって、子どもの海外留学が手の届くものとなってきました。

しかし、海外留学の若年化や大衆化を背景に留学生在の数が増加する一方、彼らの質の低下が指摘されるようになりました。また、欧米諸国の景気低迷を受け、中国に帰国する留学生在が急増しました。その結果、各界で活躍する「海亀族」がいる一方、思うような職に就けず、海に漂うコンブのようにゆらゆらと仕事を待つ「海帯族」が現れ始めました。

中国のグローバル化とともに低下する留学の優位性。「海亀族」はやがて死語に

かつて中国の将来を背負う一握りのエリートの特権だった海外留学。現代において、留学は特別なことではなくなり、「海亀族」がもてはやされる時代は終わりました。中国国内の教育レベルも上昇し、国際交流の機会も多様化したことから、国内で学ぶ学生と留学生在の間で、知識量や視野の広さなどの格差は縮小してきています。就職には、留学生よりも、中国国内のマーケット情報に精通した国内残留留學生の方が有利という見方もあります。

一方、中国の留学熱は冷めません。ある調査では、中国の留学需要が 2015 年に 319 万人に達するとしており、海外を目指す若者は、今後も増え続けると予測されています。

留學生の優位性は将来的にますます低下していくことが予想されます。しかし、それは、中国のグローバル化が進展し、成熟してきたことの現れでもあります。「海亀族」という言葉が死語になる日も、そう遠くはないのかもしれませんが。

(北中所長補佐 仙台市派遣)